

## 「久留倍官衙遺跡」をめぐる諸問題

堀越 光信

**国** 指定史跡「久留倍官衙遺跡」は一般国道1号北勢バイパスの建設にともなう事前調査で確認された古代朝明郡の役所跡で、①政庁・正倉院などの全体像や変遷がわかる、②ほかの官衙遺跡と異なり東を向いている、③「壬申の乱」や「聖武天皇の東国行幸」の史実と結びつく可能性があること、から古代史解明のうえで重要な意味をもつ遺跡として2006(平成18)年に国史跡に指定された。遺跡は、大きく3期にわかれ、Ⅰ期(7世紀後半～8世紀前半)は、正殿と、左右に脇殿を配し、正面に建つ八脚門より連なる塀により圍繞された政庁を中心に構成される。Ⅱ期(8世紀中頃～8世紀後半)は、Ⅰ期政庁に重なる位置に建造された平面積200㎡をこえる長大な建物を中心とする建物群。Ⅲ期(8世紀後半～9世紀末)は、4×3間ないしは3×3間の平面をもつ倉庫が複数整列して建てられた正倉院を形成する建物群へという変遷が確認されている。

### 壬申の乱と朝明郡

『日本書紀』(以下、書紀)によれば、吉野に隠棲していた大海人皇子の元に近江側に兵を集めているとの報が齎され、672(天武元)年6月24日座して身を亡ぼす訳にはいかぬと急遽挙兵したと記す。事は急にして、出立は徒歩による行軍で、付き従う者も皇子や舎人達20人余りと女孺10人余りという状況であった。進むにつれわずかずつ従者も増えてはくるが、伊賀に入るとそこは敵地、大友皇子の母の出身地。駅家を焼き払いながら進軍する。夜を徹した行軍で、日付がかわると高市皇子等が合流し、鈴鹿峠(加太)をこえると伊勢の国司等の出迎えを受ける。その後、小休止するが、雷雨に見舞われ寒さのあまり三重の郡家で屋1軒を焼いて暖をとっている。

翌26日、旦(早朝、夜明け)に朝明郡の迹太川のほと

りで天照太神を望拝している。実は、書紀にはここに明らかな潤色が認められるのである。書紀編纂の材料の1つである「安斗智徳日記」(『釈日本紀』私記所引)には望拝の時刻を「辰時」(朝7時～9時)と記している。当該資料は従軍日記であり、それに「辰時」とあるものをなぜ「旦」と改めたのか。旧暦の6月26日は現代の暦で7月29日、久留倍の日の出は4時59分、7時～9時の太陽高度は22.7°～47.2°。「旦」=日の出とはかなりイメージのギャップがある。実は、大海人の天照望拝は、久しく絶えていた朝廷と神宮とを取り結び直す行為であり、『万葉集』の高市の殯宮の時の歌(巻第二、199番)に柿本人麻呂が歌い上げたように、天照の神威が大海人を勝利へと導いたと人々は確信したのである。そのため書紀編者は「辰時」ではなく、「旦」=日の出とドラマティックに表現したのであろう。また、久留倍の建物群が東向きである要因もここにあるのではないかとすなわち天照を望拝した東の方位を、大海人側に与した一族の標章として建造されたのではないかと①。朝明郡に入ると戦況は少し好転してくる。大津皇子が合流したり、美濃の軍勢が不破道の封鎖に成功したとの報が齎されたり……。郡家に入ると作戦が打ち合わされ、高市を総大将として不破に、また東海道・東山道に向けて起兵の使いが遣わされている②。

### 大来皇女と伊勢神宮

大来皇女は、歴史上確認できる初代の斎王として知られる人物であるが、壬申紀中にはその名前は見出せず、壬申の乱時の所在が不明である。ここで注目したいのは、飛鳥宮跡東の土坑出土の「辛巳年」(681(天武10)年)や「大友」「近江」などを含む1082点の木簡の削屑の存在である。これらは、天武10年の歴史書編纂の命を受けて書かれたものとみられ、の

ちに書紀として結実する歴史書の編纂が未だ記憶に新しい壬申の乱の記述から検討されたのである。実はこれらの中に「大来」の削屑が2点検出されており、歴史書編纂の当初には2カ所に大来の記載があったことが知られるが、それが編纂の過程で省略されるにおよんだのである。この書紀における省略は、先掲の拳兵当初の女孺10人余りの中に明らかに同道していた<sup>うののささら</sup>鷗野讚良皇女(のちの持統天皇)の名前が省略されていることに類似する。では、大来の名前はどこに記載されていたのであろうか。1カ所は、先の10人余りの女性の中の1人であろう。もう1カ所は、実は天照望拝の記事においてではなかったのだろうか。つまり、この実際の神事を司ったのは未婚の皇女である大来ではなかったかと考えるのである。だからこそ、翌年4月に、初代の斎王として泊瀬の斎宮で潔斎を重ねたのち、伊勢へと発遣されるにおよんだのであろう。大来が斎王として遣わされることは迹太川の望拝時にすでに決したことであり必然であったのである。神宮側の記録(『太神宮諸雑事記』)にも、合戦に勝利したあかつきには皇子を神宮の御杖代として斎進させる旨が記されている。

### 聖武天皇の東国行幸

久留倍官衙遺跡におけるもう1つの大事件は、720(天平12)年10月から始まるの聖武天皇の行幸である。時はまさに九州で藤原広嗣の乱がおこっている最中で、聖武みずから「その時に非ずと雖も」と述べる如くで、この行幸は乱を恐れた聖武の逃避行「聖武彷徨五年」と称された時期もあったが実際はどうだったのか。私は、この行幸を3段階にわけて理解している。①は河口の頓宮で神宮に奉幣を行うまで、②は赤坂から不破の頓宮まで、③はそれ以降。

①は、古くは広嗣の乱平定の祈願と考えられたが、『続日本紀』によると11月3日の奉幣使発遣以前の10月29日に到着した奏<sup>みつえし</sup>④で聖武は広嗣の捕縛を認識しており、この段階で乱平定のための祈願の必要はすでにない。神宮への奉幣は行幸の最終目的である恭仁宮への遷都を報告した<sup>みかのほら</sup>ものではないか。事実、聖武は数年前より恭仁宮近くの麩原離宮への行幸を繰り返しており、この前年には元正太上天皇を伴って行幸し、また橘諸兄の相良の別業にも赴いている。これらは恭仁宮遷都への布石であり、乱が勃発して

もすでに決していた遷都の行幸を強行したのである。②赤坂から不破までは、壬申の乱と全く同じ道程をたどっており、皇族<sup>④</sup>や橘諸兄・藤原仲麻呂ら廟堂に列する貴族たちとともに騎馬400騎を率いて、曾祖父大海人の壬申の乱を追体験したのである。朝明郡には2泊し、万葉集には4首収載され、居所を狭残行宮<sup>⑤</sup>と記している。また、この時、久留倍の地を訪れていた可能性は大で、その時の建物が久留倍のⅡ期の長大建物<sup>⑥</sup>と考えられている。そして、不破に至って騎馬400騎を解いて帰京させている。大海人は、不破より先には進んでいなかったからである。③は、それ以降、恭仁宮への遷都の行幸である。

久留倍官衙遺跡は、現在、久留倍官衙遺跡公園として整備されている(巻末図版上参照)。

①朝明郡の豪族(船木氏:『統括遣往生伝』良源)はいち早く大海人に協力したのであろう。乱の翌年、伊勢を中心に各地から大安寺への大規模な所領の施入が行われるが朝明郡は免れており、744(天平16)年道慈の卒去の際もこれを免れている(『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』)。

②大海人が立ち寄った場所はどこかということになるが、壬申の乱の当時にすでに丘陵頂部にⅠ期の政庁が整備されていたかという点と少し無理の感もある。実は、丘陵裾部に同じⅠ期に分類され、政庁とは方位を異にする一群の建物群があり、これが郡家(初期評家)であって、行軍路とみられる郡伝路からも高低差なくほぼ水平に侵入できるこの建物群に立ち寄ったのではないだろうか。

③11月21日赤坂の頓宮での叙位記事中に西国に遣した佐伯常人・阿倍虫麻呂の名がみえており、彼らが奏上したのではないか。両名に対する叙位は広嗣追討に対する戦功であろう。

④おそらく元正太上天皇・光明皇后も同道した壮大な行幸であったものとみられる。

⑤「狭残」は朝明川下流域右岸に関わる地名で、郡家や久留倍の長大建物とは別に禾津頓宮のような建物の存在が想定されるのではないか。

⑥昨年(2021年)、名張川沿いの台地上にある薦生遺跡の発掘で、久留倍のⅡ期と同様の奈良時代の長大な掘立柱建物が検出された。薦生遺跡は大和から伊勢へと向かう沿道にあり公的な施設(古代の役所)と推測されている。これらは久留倍Ⅱ期に酷似する建物群で、聖武行幸に関連した建物と考えるべきであろう。聖武行幸の頓宮(行宮、かりみや)とは、その名とは裏腹に、既存の施設を利用したばかりでなく、禾津の頓宮や久留倍と同様に、長大な建物群等を含む立派な施設が、少なくとも麩原離宮への行幸の頃から準備されていたのであろう。今後、聖武行幸に関わる遺跡の発掘調査が進めば同様の長大建物を含む頓宮の実態がさらに明らかになってくることであろう。

(ほりこし・みつふ／皇學館大学史料編纂所共同研究員・  
元四日市市立博物館学芸員)